

◆2021年11月第3週の礼拝説教

■日時：2021年11月21日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「キリストがわたしの内に生きておられる」

■聖書：新約ガラテヤの信徒への手紙2：15-21（p344）

■讃美歌：152「みめぐみふかき主に」・289「みどりもふかき」

お早うございます。

昨年来、オンラインによる礼拝が中心でしたが、私たちはマルコによる福音書を通読した後、パウロ書簡に入り、ローマの信徒への手紙の各章から重要と思われる箇所を取り上げてひとまず読み終えました。そして、先週からはガラテヤの信徒への手紙に入りました。

ところで、パウロがあれほど激しく戦い、否定した、律法とは一体どのようなものであったのか、今日の第2章に入る前に見てみたいと思います。

以前から、613に上る律法の規定を知りたいと思っていましたが、一昨日、インターネットから取り出して見てみました。当時のユダヤ社会で生活する人々の生活の隅々にまで行き渡り、彼らの信仰生活と社会生活を規制した掟です。613にも上り、丁寧に読むと相当の時間がかかる膨大な数です。

冒頭は、「神を知りなさい」です。十戒の記されている出エジプト記20章2節の「あなたには、ほかに神があってはならない」の掟です。そして、モーセ五書、即ち創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記に記されている御言葉から、神様に関する重要な教えが選ばれ、記されて行きます。

続いて、同胞であるユダヤ人に関わる掟が並びます。

「他のユダヤ人を愛そう」から始まり、偶像崇拜や偽りの教えへの断固とした拒否です。

「偶像崇拜に翻った都市を燃やし・・・再建してはならない」あるいは「偽預言者を殺すことを恐れてはならない」、さらには「イスラエルの地において、彼ら（偶像崇拜者）と一緒に住んではならない」と記されています。

生活習慣における掟も少なくありません。「悔い改め、罪を告白する」「日ごとに二度シエマアを暗唱しよう」「頭に聖句の箱を着用し、腕に聖句の箱を撒きなさい」「男性は各自トラーの巻物を書かなければならない」「全ての男性に対し、生後7日目に割礼を施しなさい」「安息日に都市の境界の外を歩いてはならない」「贖罪の日に自分自身を苦しめなさい」など、延々と続きます。

以上紹介した中で、「悔い改め、罪を告白する」なら私たちでも理解出来ます。しかし、レビ記16章29節をもとにした「贖罪の日に自分自身を苦しめなさい」は、どのように受け止めたら良いのでしょうか？

新共同訳聖書188頁をご覧ください。下の段29節から読みます。

29：以下は、あなたたちの守るべき普遍の定めである。第7の月の10日にはあなたたちは苦行する。何の仕事もしてはならない。土地に生まれた者も、あなたたちのもとに寄留している他国人も同様である。

30：なぜなら、この日にあなたたちを清めるために贖いの儀式が行われ、あなたたちの全ての罪責が主の御前に清められるからである。

31：これは、あなたたちにとって最も厳かな安息日である。あなたたちは苦行をする。これは不変の定めである。

29節に在る第7の月と言うのは、現在の暦では10・11月です。イスラエル民族にとっての新年は、刈り入れの初穂の月、3・4月に始まるので、それから数えて第7の月ですから10・11月に当たります。この月の1日から10日間は、ユダヤ民族にとって特に重要な時です。今お読みしたレビ記に記されているように、自らに苦行を課すことによって罪が清められるとされた時ですから。

ただ問題は、このような掟は、彼らにとってどのような意味を持っていたのかと言うことです。そして、パウロは、なぜこれらの掟を厳格に守る律法主義を否定し、信仰のみによる救いを語ったのかです。

律法主義を否定することがどれほど困難なことであったのか、そしてパウロはなぜそれが出来たのかを知りたいと思います。

困難さについてです。

律法の土台を為すのは、神様との契約です。神様との契約とは、祝福の約束です。モーセに与えた十戒は、双務契約、即ち神様が与える戒めを守ることによって、神様から祝福を受ける、それが律法の土台です。

イスラエルの民にとって、律法を守ることは、神様の祝福を受け、自分の生きる意味が明らかにされることであり、律法を破ることは、神様の祝福から取り除かれること、即ち生きる意味が失われ、自分と言う存在が否定されることを意味しました。

ですから、己の生き死にの存亡に関わる律法を、どんなことがあっても全身全霊を尽くして厳守しようとしたのです。律法を守ることが困難になればなるほど、その困難さを克服することにより、神様からの祝福がより豊かになると考えるようになるのです。

しかし、律法を完全に守れる人間など誰一人としていません。

律法を守ることによってではなく、キリストの贖いの十字架を信じ、神様を信じる信仰によってのみ祝福は与えられ、救いは与えられることを、神様はパウロによって人々に知らせます。新たな福音が宣べ伝えられたのです。

パウロになぜそれが出来たのでしょうか？

それは、ダマスコ途上での復活のイエス様との出会いです。

パウロにとって、その経験があったからこそ、新たな福音の使者として立つことが出来ました。

それでは、今日与えられたガラテヤの信徒への手紙第2章15節に入ります。

15：わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。

「異邦人のような罪人」と言う言葉ですが、これはパウロの傲慢さを言い表わす言葉ではなく、当時のユダヤ社会において、律法を守れない、守らない者は罪人とされていました。ですから、律法を持たない異邦人は、ユダヤ人からは皆罪人と見なされていました。

16：けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義としていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです。

この言葉は大切です。

パウロ自らの経験によるものであるからです。

パウロは、1章14節で遠慮がちに述べていますが、律法を守ることは「・・・人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていた・・・」と言うのです。

当時の人々にとって、神様によって義とされる、義しいとされることは、自分の命よりも重大なことでした。パウロも又、神様の義を得ようとして、割礼を受け、レビ記11章に記されている食物規定を守り、汚れた動物とされる野ウサギや豚などは食わず、その全生活において律法のあらゆる細部に至るまで、己を打ち叩いて守り、従わせようとしていました。そうすることによって、神様によって義と認められようとしたのです。

しかし、律法を厳格に守ろうとすればするほど、そのように出来ない自分を見出すのです。

律法を完全に守ろうとすればするほど、律法から遠ざかり、疎外されて行く自分を覚えたのです。まさに、律法に生きようとして、律法によって死ぬ、つまり、律法に敗れて行く自分を見出したのです。そして、その時に、イエス・キリストの啓示を受けました。

律法を守ることによって人は義とされることはない、ただ、神様から与えられる恵み、私たちの全ての罪を背負って十字架に着けられ、罪に死んだ主イエス・キリストを救い主として信じる信仰によってのみ義とされると言う啓示を受けました。

ですから、17節から19節。

17：もしわたしたちが、キリストによって義とされるように努めながら、自分自身も罪人であるなら、キリストは罪に仕える者ということになるのでしょうか。決してそうではない。

18：もし自分で打ち壊したものを再び建てるとすれば、わたしは自分が違反者であると証明することになります。

19：わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。

「キリストによって義とされる」、即ち神様の恵みによって罪を贖われた私たちが、未だ罪の内に留まろうとするなら、そのような者たちのためにキリストは十字架に架けられたのでしょうか、そうではありません。あるいは又、今や律法を守ることによってではなく、キリストを信じる信仰によってのみ救われるとの教えに立つ私が、律法による救いを唱えて来たこれまでの罪は、キリスト共に十字架につけられ、滅ぼされています。

そして、20節。

20：生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。

私の全ての罪を背負って十字架に架けられ、その罪と共に滅ぼされた主イエス・キリスト。しかし、主は、永遠の命が与えられる私たちへの約束の初穂となって甦られ、そのキリストが私の内に生きておられます。今、このように地上での歩みを行っている私は、「わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰」によって生きているのですと、使徒パウロは語ります。

21節です。

21：わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

旧約の時代において、人々は律法を厳格に守ることによって、神様に義とされると信じていました。しかし、どれほど優れた、信仰深い人であっても、律法を完全に守ることは出来ませんでした。だからこそ、そのために神様はその独り子のイエス様を私たちの下に遣わし、

その一方的な恵みによって私たち信じる者を義として下さいました。

それがパウロに、そして私たちに示された神の恵みであり、パウロはその恵みを無にすることは出来ないと言っているのです。

今日の聖書箇所を調べていると、1517年、ドイツのヴィッテンベルクの城教会に、95箇条の提題を張り付けて宗教改革を始めたルターの話がある注解書に載っていたので、紹介します。

宗教改革を始めたルターは、その当時はカトリックの修道僧でした。

修道僧として、ルター派、修養を重ね、あらゆる苦行・難行を行い、己に克ち、神様の義を手に入れようとしていました。ルターは、「もし誰でも修道生活によって救われるとすれば、その人物は私であった」とまで述べていました。ある時、ローマでの「スカラ・サンクタ」と言う修行、即ち大聖堂の聖なる大階段を両手と膝とを使って登ることは、優れた功績を上げることになると考えられていたため、ルターはローマに行きます。そして、功績を得ようこの階段を骨を折って登り始めました。その時です。突然ルターに天からの声が聞こえます。「義人は、信仰によって生きる」と。即ち、人は行いではなく、ただ信仰によって義とされるとの声を聞きます。

パウロにしても、ルターにしても、信仰によって神様を受け入れる時、律法や行いの挫折による暗黒は、恵みの輝きへと変えられました。

祈りましょう。